伊藤若冲「白象群獣図」と西陣織下図「正絵」の関係についての再検討

太田 梨紗子（神戸大学）

伊藤若冲（１７１６～１８００）は、近世京都画壇で活躍した画家として近年とみにその評価が高まっているが、彼の作品に見られる絵画面全体を枡目の集積のように彩色した「枡目描き」は、若冲独自の技法として知られている。この技法をめぐっては、朝鮮由来の紙織画や、染織品の下図等がその着想源として指摘されてきた。中でも１９９９年に泉美穂氏が提示した西陣織の下図「正絵」との関わりは、経線と緯線を引く画面が枡目描き作品を想起させる上、若冲と西陣の織元・金田忠兵衛との関係が明らかにされたことから、若冲が枡目描きを創出するにあたって「正絵」を参照した可能性が、注目されてきた。しかし、現在に至るまで枡目描きと「正絵」との関係に更なる検討を加えた論考は公にされていない。これは「正絵」があくまでも染織の下図であること、織屋で厳重に保管され、その意匠は、本来門外不出のものであったと考えられることなどが研究の進展を困難にしていたためと推察される。しかし、近年、織物産業の斜陽化に伴い、巷間に「正絵」が流出するところとなり、２００６年には「正絵」を主とした展覧会が立命館アートリサーチセンターで開催されるなど、「正絵」の見直しが進んでいる。「正絵」については、新たに見出された作例の中には、近代以降の作例ではあるものの、泉氏の論考では提示されなかった濃彩に経線と緯線を配した「正絵」も存在し、それらはこれまでの枡目描き研究の中で紹介されてきた墨画淡彩の「正絵」以上に若冲の桝目描き作品に近似している。

本発表は、泉氏が枡目描きの着想源として提示した「正絵」について、近年の研究成果を参照しながら、改めて若冲におけるその受容の検討を試みるものである。

検討にあたっては、所在不明のものも含めた枡目描き作品全四点のうち、「白象群獣図」（個人蔵）をとりあげる。本作品は四点の中で唯一若冲の印章を有すること、伊藤家伝来の来歴があること、また微細かつ精緻な表現は、若冲自身の手によるものと考えられることから検討の中心に据えるべき作品と考えられる。さらに本作品は現在の額装、それ以前の屏風装とされる以前は、若冲の生前から「捲り」の状態で保存されていたことが推察されており、これは見本としてそのほとんどが「捲り」の状態で保管される「正絵」と共通した形態で保存されてきたことを意味する。

今回の発表では、「白象群獣図」の主題、形状、枡目描きの技法から改めて「正絵」や西陣織の現存作品との比較を行うことで、「白象群獣図」と「正絵」との関係を考察し、あわせて「白象群獣図」の制作年代を再考する。そして、これらの検証から「白象群獣図」自体がまさに織物の「正絵」として制作されたものであった可能性を指摘したい。